

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 132 号

平成 25 年 4 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（11）

第 40 講 救いの完成（7）

聖霊のうめき

御霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けて下さる。なぜなら、わたしたちはどう祈ったらよいかわからないが、御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをもって、わたしたちのためにとりなして下さるからである。（ロマ書 8 章 26 節）

聖霊、すなわち神の霊が「うめき」をもって我々の弱さを助け、我々のためにとりなしをして下さる。これが、われわれに信仰が与えられ、信仰を持ち続け、我々もまたうめきながら、復活を待ち望むことができる源となるのであります。真理の御霊が、我々の弱きを助け、我々のとりなしの祈りをなし、我々に復活を望むうめきを与えて下さる。このようなことは、ユダヤ人の誰もと言わなかった。私は、これはパウロの独創であると思います。……

我々は自分で信仰を続けていると思ったら大間違いです。それをうぬぼれという。我々はうぬぼれることができるような上等な者ではありません。祈りというのは、あれこれと欲しいものを言うことではありません。本当の祈りは、神の意思が成るようにと祈ることです。そして、神の意思をなそうとする祈りは、必ず聞かれます。天地宇宙万物のうめき、信者のうめき、そして聖霊のうめきは、いずれも祈りであり、預言であります。神の意思に適っていますから、必ず成就する。

（P.313）

復活の願いはかならず成就する

必ず我々信者の復活の願いは成就します。宇宙万物が祈り、聖霊ご自身が祈っているというのですから、神はこの祈りを聞き給わないはずはありません。我々は、大胆にこの宇宙完成を信じます。たとえ、科学者がこの復活の信仰に反対したとしても、私は信じます。未来の出来事について、もしあるかないかを議論する場合、その事実が起こるまでは、有ると言った方が負けになります。...現在、イエスの再臨、我々の復活、宇宙の完成を信じている方が負けであり、「二千年も経った今、まだイエスの再臨は実現していない、そんなことは嘘であり、迷信である」と言う人々の方が勝ちとなります。しかしながら、いよいよその時が来た時には、我々が勝ちます。それまでは、我々は忍耐する。古くはパウロ、新しくは内村先生、私はこのお二人だけで十分ですが、これらの方々に従い、この事実を信じて、待望の生活を送りたい。そして、復活再臨を待望して生活した人間がどうであったか、その実例を残したいと願っています。君達がこれを信じるか、信じないかは、私にとって問題ではありません。

(P.313)

信仰とは、先生の真似をすること

「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ロマ書 8 章 28 節)

この節(ロマ書 8 章 28 節)で、「わたしたちは知っている」という字が最後に来ていますが、原語では初めにきています。「我々は知っている」とパウロは言う。人生の経験を通して知っている、確信している、と言っています。その確信は、誠に大事なことであり、我々もこういうパウロの確信を頂きたい、真似をしたいと思います。その確信は、誠に大事なことであり、我々もこういうパウロの確信を頂きたい、真似をしたいと思います。信仰というのは、先生の真似をすることです。未知の世界を体得するには、信じて真似をする一手しかありません。 (P.315)

「万事」とは、我らに起こり来る一切

〔ロマ書第8章28節の〕「万事」ということについて、内村先生はゴデー先生の訳「すべてのことというのは、我らの上に起こりくる一切を指す。今の世の不完全と人間の罪の結果として起こる苦痛の一切を指す」を引用され、「この訳は名訳である」と言われました。この世は苦痛であります。なぜ苦痛かと言えば、ゴデー先生が言われるように、今の世は不完全ですから、信者を含めて、世の中の人は罪人ですから、我々には悲しみ、苦しみが付いてきます。覚悟すべきです。この世で悲しみ、苦しみが無いと言うのは嘘であります。自分も不完全であり、相手も不完全ですから、統合すれば常にごたごたが絶えない。それを相手が悪いと言って責めるのは間違いです。先ず、自分自身を責めるべきです。教会ではそういうことを学ばなければいけない。この教会では、来られる人に対してチャホヤとは致しません。...

この世は思うようにならない。不完全に満ちています。悲しみ、苦しみ、涙の谷です。若い人々が社会へ出る時は、自分の禪（ふんどし）をしめ直して取りかかる必要があります。この世は決して春の野に行くような場所ではありません。クリスチャンは名だけの信者に過ぎないのに、自分で何か偉い者になったように思っていますが、楽々とキリスト教信者になれると思ったら、大間違いです。内村先生は、「咲く花は多し、されど実になるは少なし。実となるは多し、されど熟するは少なし」と言われました。

この「すべてのこと」というのは、我々の上に置かれている一切を指します。すなわち、パウロは、この世の悲しみも苦しきも一緒に働いて、我々に永遠の生命を与え、復活の希望を与え、私の救いとなると言っているのです。実に有難いことではありませんか。このことが本当に自分の確信となったら、我々は悲しみに文句を言わなくなります。その時は辛いですが、悲しみ、苦しきから逃避しなくなります。そして、勇敢に立ち向かっていく力が与えられます。諸君！ 悲しみ、苦しきから逃げたらいけません。

復活のために、万事が働く

我々は、復活しつつある者であります。このために万事が働く。悲しみ、苦しみ、すべてのものがそのために働く。そうならなければいけない。それをクリスチャンという。諸君がそれを分からないというのは、苦しみが無いからであります。本当に苦しみがあつたら、このことが分かるはずであります。

我々は幸か不幸か、苦しみが少ない。そうですから、何十年経ってもボヤボヤしています。はっきりとしない。内村先生は、「自分の一生を省みて最も幸福、最も感謝すべきことは、自分に困難が臨んだことである」と言われました。我々は、困難に対して、もう少し禪(ふんどし)を締めてかかる必要があります。困難から逃げずに、自分の思うようにならないことがあれば、真正面から取り組んで下さい。そうすれば、無限の尊いものが我々のものとなります。諸君はどうですか。

福音が確実であることは、我々が困難に遭遇して初めて分かる。涙の谷を通過して、我々の天国がはっきりと見えてくる。復活の希望がかなえられてくる。ロマ書第 8 章は、復活の希望を書いた場所です。これが分かった時に、第 8 章 31 - 39 節の勝利の凱歌が拳がります。

追撃戦になる人生を送れ

パウロという人は、非常に良心の鋭い人でした。自分の罪を、死ぬまで問題としていたようであります。自分の不完全なこと、自分の悪い点、神に反している点、人に対しての誠実がないこと、自分がなっていないということに対して、実に驚くべき真剣さを持ちあわせておりました。ロマ書を書く時になっても、まだ自分の罪を問題にしています。...パウロの手紙は罪との戦いであると見ても宜しい。パウロの一生は真摯な魂の、罪との戦いです。ここでは、罪との戦い、すなわち、追撃戦をやっています。

内村先生は、追撃戦というものは愉快だと言われました。戦争に負けている時は苦しいけれども、いよいよ戦いに勝って、今度は敵を追う時は非常に愉快です。戦争の例はあまり適当ではありませんが、人生の闘いも同じことです。我々の人生も、初めの間は、悲しみや苦しみにへこたれ、負けているけれども、だんだん勝利に向かって来て、人生の悲しみや苦しみに対して、追撃戦になるような人生を送りたいものです。いつまでもへこたれていてはいけません。歳をとるにつれて追撃戦に移るべきです。ここでパウロは、己の罪に対して追撃しています。

「何を言うか、罪よ！ 自分はキリストによって勝っている。その罪とは何か、己の罪は何か」と、自分に向かって言っているのです。他人のことと置いていけません。自分の生活に当てはめるべきです。我々は説教を他人事と思って聞いているから、少しも自分の力になって来ない。自分の生活に当てはめなければいけません。

(P.325)

勝ち得て余りある生涯を送れ

「わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある」

(ロマ書 8 章 37 節)

ロマ書第 8 章が、人類 2000 年の歴史において、どれだけ人類を幸福にしてきたか。悩み、苦しみにへこたれた人類に対して、いかに貢献してきたことか。我々が天国へ行ったら、それが分かります。

パウロは、人生における患難、苦悩、迫害、剣、いかなる困難に対しても、勝ち得て余りある力を持っていました。我々も、この信仰を神様から頂き、分相応に我々の人生における悲しみ、苦しみに勝ち得て余りある生涯を送る者になりたい。初めは負けていても宜しい。しかし、内村先生が言われたように、聖霊は徐々に、静かに我々に降ります。力は歳と共に増します。信仰相応にこの力を頂いて、勝ち得る人生を送りたいと思います。

神の愛は、我々信者に働いて、「復活の希望」と「主の名を呼ぶ」妙行となって現れてきます。我々は主の名を呼び、心では自分は復活すると信ずる(10 章 9,10 節)ことにより、パウロがすべてのことに勝ち得て余りがあったように、我々もまた、自分の生活においてこれを体験する者になりたいと思います。

(P.328)

第43講 ユダヤ人の不信と人類の救い(1) パウロの愛国心

クリスチャンの愛国心

パウロが同胞を思う、せめてその万分の一でも日本民族のことを思う者になりたいと思います。繰り返しになりますが、内村先生は「I for Japan」と言われた。この言葉は、いかに内村鑑三が祖国を愛したかを示しています。この頃のクリスチャンはどうですか。この頃のキリスト教の指導者はどうですか。日本の国を愛していますか。日本の国を愛せないような信仰は、キリスト教の信仰ではありません。キリスト教の信仰とは、祖国を愛するものです。イスラエルの指導者を見ればそれが分かる。イスラエルの指導者はイスラエル民族のことを本当に思っています。パウロのこの悲しみとうめきはどうですか。日本民族の本当の指導者は、日本民族の事を深く思う人に違いない。日本民族のことを本当に思わないようなキリスト教の指導者がいれば、それはにせ指導者です。日本民族がパウロ先生の福音を信ずることによって、全人類が救われるために、必ず一役買う時が来ると私は信じています。我々の祖先は、特に宗教的分野において、優秀な信仰を歴史に示してきました。キリスト教が日本に入って、日本民族が貢献することによって、日本を通して、より一層光を放つキリスト教を全人類に提供する時が必ずやって来ると確信します。特にこの「信ずる」という面において、すなわち、キリストを信じるということは、具体的にキリストのどこをどのように信じることであるか、日々キリストを信じて生きるということ、具体的にどのように生活することであるかについて、日本民族が、ロマ書を通し、世界人類に明らかにする日が必ずやってくると確信します。(P.336)

第44講 ユダヤ人の不信と人類の救い(2)

ユダヤ人の不信と恵心流キリスト教

ロマ書9・10章の大意

10章では、イスラエルが何故救われないかの第2の理由として、イスラエルの不信を述べています。その時、パウロははからずも、1-8章で述べた福音を要約して、難しく理詰めで言わず、一言で述べたらこうなると、簡単に言い表わした箇所であります。ですから、ここは非常に大切な箇所であります。

パウロが言っている救いとは、10章の9、10節を学び、この2節を圧縮した13節が分かれば、それで宜しいと思う。それだけで、もうパウロの救いを完全に理解したことになります。いかにこの箇所が大切であるかが分かります。この箇所は、私を知る限り、キリスト教の歴史においてはまだ注目されておられません。これは我々日本人が注目すべき箇所であります。幸い日本においては、仏教において「救い主の名を呼ぶ」ということが、数百年にわたって研究されてきました。すなわち、救い主、阿弥陀仏の名を呼ぶことが救いにつながるという教えが、善導大使と恵心僧都を先生として、法然上人によって完成され、さらにそれを親鸞上人が受け継ぎました。すなわち、この「救い主の名を呼ぶ」ということは、恵心僧都をもって、日本において最も明確に現されたのであります。

(P.340)

「神はイエスをよみがえらせられた」と信ずることは、私に

永遠の生命を下さったことを信ずることになる

「すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる。」(ロマ書 10 章 9 節)

ここ〔10章9節〕では、パウロは救いの条件を二つ挙げています。すなわち、第1に、自分の口でイエスは主であると告白すること。第2に、自分の心で神が死人の中からイエスをよみがえらせたことと信じること。

「主であると告白し」というのは、疑い深いトマスが「我が主、我が神よ」と言ったように、「我が主イエスよ」と言い現わすことでもあります。もう一つの条件は、心で、「神が死人の中からイエスをよみがえらせた」と信じることです。ロマ書4章25節には、「主は、わたしたちの罪過のために死に渡され、わたしたちが義とされるために、よみがえらされたのである」とありますから、「神がイエスをよみがえらされた」と信じることは、「イエスの復活のお陰で自分の罪が許されて、この自分もよみがえる」ということを信じることであります。イエスの復活は、私の義の成就であり、私の救いの完成でありますから、「神はイエスをよみがえらせた」と信じることは、「神はイエスの贖いによって私に永遠の命を与えて下さった」と信じるということになります。パウロの福音はこれに尽きます。(P.341)